2023
10
No. 727

國學院大學學報

「洗馬長興寺」

寺の庭
秋の日もはら　みちにけり。
もの、音なく　明るくてあり
（「春のことぶれ」）
釈　迢空

国学院大学
令和５年10月20日㈮　定期号（毎月20日発行）１部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目　［電話］03（5466）0130　［FAX］03（5466）0528

祭　儀　■ **創立記念祭**　11月１日（水）　午前10時　仮殿　■ **関係物故者慰霊祭**　11月１日（水）　午前11時　百周年記念館記念講堂

研究者に聞く

会計学でNPOのミッション達成を支える

経済学部・金子良太教授

会計学といえば、ドライに数字とにらめっこする学問――そんなイメージは、金子良太・経済学部経営学科教授の話を聞いていると、がらりと変わってくる。

非営利組織（NPO）の会計という、耳慣れない分野の研究を進めている金子教授の歩みを振り返ってみると、私たちの社会や生活に密接に関連した活動を行う非営利組織に、なぜ目を向けるようになったのかがよくわかる。そこにあるのは、一人の人間としての真摯な態度だ。

きっかけの一つは、2009年から11年までのアメリカ滞在だという。現地で異文化の紹介を行う組織や、アメリカへやって来たばかりの人の地域順応を手助けする活動にふれ、その一端に惹きつけられたという。もう1つのきっかけが帰国後に発生した東日本大震災だ。多くの団体が震災復興に懸命に貢献する姿を見たことで、社会で非営利活動がなしうることについて、改めて思いを馳せるようになったと語る。

営利を目的とせず、私たちの社会や生活の只中で何かしらのミッションを果たしていこうとする、非営利組織。そのミッションを果たすためにこそ、会計学ができることがある――そう、金子教授は信じている。

非営利組織の会計をめぐる課題と可能性について話を聞いた。

4・5面に関連記事

池田教授・西日本文化賞受賞

蒙古襲来の水中遺跡研究を評価

公益財団法人西日本新聞文化財団が主催する第82回「西日本文化賞」の各部門受賞者が10月３日に発表され、国学院大学研究開発推進機構の池田榮史（よしふみ）教授＝**写真**＝が学術文化部門で受賞した。

この賞は、西日本新聞社が九州・沖縄地域の文化、芸術、学術などで顕著な業績を挙げた個人・団体を顕彰するため、昭和15（1940）年に創設。今年度からは同財団が主催している。

池田教授の専門は、水中考古学、日本考古学、博物館学。特に水中考古学では、鎌倉時代に起きた蒙古襲来の古戦場である長崎県松浦市鷹島町沖合の海底遺跡「鷹島神崎遺跡」の調査、研究で成果を挙げている。

同遺跡周辺は、元寇の船団が暴風雨で沈没した地点であり、池田教授は平成23（2011）年に沈没した元寇船を発見し、大きな話題となった。26年には２隻目の沈没船を発見したほか、令和４年には約２ｍの木製いかりを引き揚げるなど、蒙古襲来の実態解明に繋がる成果を挙げている。今回の受賞は「歴史研究に新たな展望を開いた」と功績が評価された。

今後、贈呈式が11月３日、受賞記念講演会が12月３日に福岡市で開催される予定。

み

はるかすもの

ようやく秋らしい過ごしやすい気候になってきた。四季のなかでも収穫物の多くなるこの時期、「食欲の秋」として旬の食材に舌鼓を打つことができる▼そんな秋の味覚に異変が起きている。代表的な存在である秋刀魚は、近年で漁獲量が大きく減少。年間水揚げ量で平成22年から12年連続日本一を誇る千葉県の銚子漁港でも、昨年度は約70年ぶりに秋刀魚の水揚げゼロになった▼今年は昨年同時期の数倍程度、水揚げが増加している漁港もあるそうだが、それでもかつての豊漁時とは比べ物にならないという▼東京中央卸売市場での秋刀魚の１kgあたり卸売平均価格は、平成15年８月が508円、今年８月が1237円と２倍以上に値上がり。俳句の季語となるほど身近なはずの庶民の魚が、遠い存在になりつつある▼不漁の原因には、生息数の減少、温暖化による海水温の上昇と潮流の変化、外国船による漁獲の増加などが挙げられている▼秋刀魚に限らず、今夏の猛暑でマツタケなどのきのこも生育不順となり、収穫量の減少が予想されている。自然の中で育つものが、温暖化などの影響を受けることは当然の帰結ではある▼山の幸、海の幸に恵まれる日本。値上げにばかり目を奪われがちだが、収穫・漁獲の減少や後継者不足などわが国の食料問題は多い。旬の味覚を襲う異変をきっかけに、今まであまり意識することがなかった問題にも目を向けてみたい。

主な内容　**2面**／新潟コメ作りワークショップ 日本文化に触れる　**3面**／「指定寄付金」ご芳名　**4・5面**／非営利組織の会計に向き合うことで、ミッション達成に貢献できることがある
6・7面／学術資産を魅せる　**8面**／母校へようこそ！ ホームカミングデー　**9面**／インフォダイジェスト

最終面から　K:DNA　**Ⅰ面**／羽田野選手 世界ジュニア銅　**Ⅱ面**／久保田・原ペア全国優勝　**Ⅲ面**／切磋琢磨で噺を磨く 奥深さの先にある達成感を求めて

手作業で稲刈りを体験した参加者たち

学生らが稲刈り

新潟コメ作りワークショップ 日本文化に触れる

9月24日、「新潟コメ作りワークショップ」の稲刈りが新潟市北区で行われ、在学生9人と教員2人をはじめ協力農家の方など約40人が参加した。

このコメ作りは、彬子女王殿下が総裁を務められる一般社団法人心游舎が主催しており、コメ作りの体験を通して、日本の文化や歴史に触れる機会として毎年実施されている。今年も学生は自然栽培に取り組む地元農家の協力を受け、田植えや草刈りに参加してきた。

野良着に着替えた学生らは一面黄金色に輝く田んぼに集合。協力農家の方々から稲の刈り取り方の説明を受けた後、実際に田んぼに入って刈り取りを行った。刈り取った稲は、地元で「まるける」と呼ばれる、藁を使って稲を束ねる作業に取り組んだ。

はじめはぎこちなく刈り取りを進めた学生たちも、協力農家の方々からアドバイスをもらうと徐々に手際も良くなっていった。なかにはこれまでもワークショップへ参加した経験がある学生もおり、初参加の学生や教員に声をかけて協力する姿も。学生らが刈り取った稲は、乾燥させるために次々と「はさ」と呼ばれる稲を干すために木や竹を組んで作った柵にかけられていった。

学生らはまだ強い日差しにも負けず約2時間の刈り取りを終えると、最後には田んぼに残った落穂を拾い、作業を終えた。

刈り取り後は公民館へ移動し、参加者全員で振り返りを行った。学生たちからは「毎日何気なく食べているおコメだが、日々労力をかけてコメを作る方の存在をじかに感じ、ありがたさを実感した」「以前参加した際は作業するのに必死だったが、今回は田んぼの周りの自然も感じながら稲刈りができた」といった感想があがった。

今回収穫したコメは、今後、太宰府天満宮（福岡県）へ奉納される予定。

農家の方の指導を受ける学生

国際交流歓迎会 8人が本学留学をスタート

9月から本学での留学が始まったK―STEP交換留学生らを迎える国際交流歓迎会が9月29日、渋谷キャンパスで開催され、学生や教職員ら約60人が参加した。

はじめに、星野靖二・国際交流推進委員（研究開発推進機構教授）があいさつに立ち、「コロナ禍を思い起こすと、留学生のみなさんが本学に来てくれたことを嬉しく思う。本学学生とも交流を深めてもらい、日本で過ごす時間が良いものとなることを願っている」と述べた。

歓迎会に集った交換留学生や在学生、教職員たち

続いて、来日したK―STEP留学生8人と国際招聘研究員が自己紹介を行い、専攻する学問や趣味、日本の好きなものなどを語ると、会場からは温かい拍手が送られた。その後は、参加者たちが自己紹介をしながら進めていく交流ゲームが行われた。参加者は「スノーボードは好きか」「ブドウ狩りをしたことがあるか」など相互に質問をしながらゲームを楽しんでいた。

懇親の時間では軽食も用意され、食事をしながら「日本で何をしてみたい？」「行ってみたい観光地は？」など会話を楽しむ様子や、連絡先を交換する様子が見受けられた。

最後は、田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）が「5大学から8人が来てくれた。日本らしい季節の移ろいを感じつつ、充実した留学にしてほしい。本学学生も、来日した皆さんの留学が素敵なものとなるよう、協力してもらえたら嬉しい」とあいさつし、盛況のうちに終了した。

今後、キャンパス内国際交流イベントであるコーヒーアワーが隔週金曜日に開催されるほか、留学生が日本文化を体験するイベントなどを通じて本学学生と交流を深める予定。

9月卒業・修了 学部74人、大学院3人

国学院大学の令和5年度9月卒業生・修了生が9月30日付で確定し、学部74人、大学院博士前期課程3人が卒業・修了を迎えた。

9月27日に行われた文学部証書授与式では、矢部健太郎学部長が祝辞を述べ、卒業生一人一人に証書を手渡した＝**写真**。

大学院修了式も同日に行われ、佐藤長門大学院委員長（文学部教授）が祝辞を述べ、指導教員からは学位論文の講評とともに、卒業を祝う言葉が贈られた。

卒業期は132期で、学部の卒業式典は令和6年3月20日に開催される予定。所属別の卒業生数は次の通り。

◎**大学院▶博士前期課程**◇文学研究科2人▷史学専攻2人◇法学研究科▷法律学専攻1人

◎**学部▶文学部**29人▷哲学科4人▷史学科5人▷日本文学科8人▷中国文学科3人▷外国語文化学科9人**▶経済学部**17人▷経済学科6人▷経済ネットワーキング学科6人▷経営学科5人**▶法学部**15人▷法律専攻14人▷政治専攻1人**▶神道文化学部**▷神道文化学科6人**▶人間開発学部**7人▷初等教育学科1人▷健康体育学科4人▷子ども支援学科2人

国際招聘研究員リーベン氏 1年間の研究成果を発表

国学院大学国際招聘研究員として滞在していたソメン・リーベン氏による研究成果発表会が9月13日、渋谷キャンパスで開催され大学院生や教職員らが参加した。

ルーヴェンカトリック大学（ベルギー）博士候補生のリーベン氏は昨年10月から1年間、手塚雄太・文学部准教授の協力を受け研究に取り組んでいた。当日は「戦間期における日本外務省の『メディア化：日露戦争から満州事変までの期間を中心に』」と題し講演。参加した学生、教職員らは真剣に耳を傾けていた。

プロバスケチームと協力 スポーツビジネスを学ぶ

プロバスケットボールリーグB.LEAGUEに所属し、渋谷を本拠地とする「サンロッカーズ渋谷」と協力した「スポーツビジネスを学ぶ講座」の第1回が9月29日、渋谷キャンパスで開催され、学生約30人が参加した。

当日は、株式会社サンロッカーズエンタテイメントマーケティングの吉村隆宏氏を招き、B.LEAGUEやサンロッカーズ渋谷の取り組みなどの概要について説明がなされた。

参加した学生は、「サンロッカーズ渋谷だけでなく、スポーツ業界そのものに興味を持つことができた」と振り返った。

「指定寄付金」ご芳名

学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広くご寄付を募っています。

令和5年4月から9月まで、**別表**の通り、多方面の方々からご寄付をたまわりました。ここに、ご芳名を掲載し、重ねて深甚の謝意を表します。

本法人に対するご寄付は、専用用紙による申し込みとインターネット上でのクレジットカード決済による申し込みが可能です。詳細は**9面**をご参照ください。

（総務部総務課）

令和5年度 指定寄付者一覧（敬称略）

令和5年4月1日～9月30日（単位：円）

申込者	寄付先	金額	収納日
藤井　岳	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和5年4月10日
新井　さきほ	学生・生徒等の奨学基金	50,000	令和5年4月12日
田中　千晴	課外活動支援（硬式野球部）	1,200,000	令和5年4月13日
關橋　淳	課外活動支援（硬式野球部）	1,000	令和5年4月24日
小嶋　芳武	学生・生徒等の活動支援	50,000	令和5年4月24日
市川　博之	学生・生徒等の奨学基金	2,500	令和5年4月24日
		2,500	令和5年5月22日
		2,500	令和5年6月22日
		2,500	令和5年7月25日
		2,500	令和5年8月22日
		2,500	令和5年9月25日
松浦　傳	学生・生徒等の奨学基金	50,000	令和5年5月16日
宇都木　丈夫	教育・研究振興支援	20,000	令和5年5月17日
高橋　真人	課外活動支援（ラグビーフットボール部）	120,000	令和5年5月22日
関根　俊	学生・生徒等の奨学基金	1,000,000	令和5年5月28日
大橋　英彦	学生・生徒等の活動支援	100,000	令和5年6月 7日
岩﨑　和友	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和5年6月 7日
矢澤　敏司	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和5年6月14日
臼杵　千枝子	学生・生徒等の活動支援（箱根駅伝と東都大学1部リーグ野球の上位入賞への支援）	200,000	令和5年6月16日
橋本博之土地家屋調査士事務所 橋本　博之	学生・生徒等の活動支援（剣道部、陸上競技部）	20,000	令和5年6月21日
牧内　りずむ	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和5年6月22日
山本　周典	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和5年6月22日
高橋　理沙	課外活動支援（陸上競技部）	30,000	令和5年6月22日
金田　亮平	課外活動支援（陸上競技部）	2,000	令和5年6月22日
喜多山　健二	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和5年6月22日
遠藤　洋之	学生・生徒等の奨学基金	30,000	令和5年6月22日
小瀬　孝雄	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和5年6月22日
伊藤　直記	課外活動支援（陸上競技部）	20,000	令和5年6月22日
昱株式会社取締役社長　中川　崇	課外活動支援（硬式野球部）	100,000	令和5年6月28日
菊池　玲子	課外活動支援（陸上競技部）	10,000	令和5年7月 7日
清水　理江子	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和5年7月 7日
		5,000	令和5年7月25日
		5,000	令和5年8月22日
		5,000	令和5年9月25日
匿名	学生・生徒等の活動支援（久我山中学・高等学校）	3,000	令和5年7月13日
		3,000	令和5年8月16日
		3,000	令和5年9月14日
株式会社アローズ・ケイ・渋谷 代表取締役　城所　俊哉	学生・生徒等の奨学基金	50,000,000	令和5年7月31日
荒井　康一郎	課外活動支援（バスケットボール部）	5,000	令和5年8月 7日
匿名	課外活動支援（硬式野球部）	100,000	令和5年8月10日
株式会社アルク 代表取締役　實川　利光	学生・生徒等の奨学基金	60,000	令和5年8月18日
青木　二朗	課外活動支援（アルティメット部〈TRIUMPH〉）	10,000	令和5年8月22日
神社本庁総合研究所 所長　田中　恆清	教育・研究振興支援（研究開発推進センター研究事業）	300,000	令和5年8月22日
国学院大学院友会徳島県支部 支部長　後藤　立夫	教育・研究振興支援	20,000	令和5年9月21日
株式会社四門 代表取締役　寶土　大亮	教育・研究振興支援（考古学研究室）	100,000	令和5年9月27日

学問ノ道 第54回

国法の本義

明治23（1890）年、皇典講究所を母体として国学院の設立が企図された折、当時の所長山田顯義によって公示された『國學院設立趣意書』では、国学院においては国史・国文・国法を攻究の基本とすることが見込まれた。国史とは日本の歴史、国文とはわが国の文学をそれぞれ意味するが、残る国法とはいったいなんであろう。

山田はよほど「国法」に思うところがあったとみえ、すでに『國學院設立趣意書』に先立つ明治21年に、皇典講究所の参襄・協賛・講師らを招いた晩餐会の席上、近時、皇室典範、大日本帝国憲法以下諸法律の制定が進み、立憲政治の準備が整い、近代国家の確立に至ったが、改めて日本の国家成立の所以と歴史を明らめる必要があることについて演説を行っている。同じ席では法制局長官井上毅も「近く憲法政治を実施するわが国も国典を講究して立国の大本を明らかにすべき」であり、「国典は国民教育上の随一で、国民の憂国心が依って生まれる基である」と説いている。当時伊藤博文と憲法原案の起草に苦心していた井上の言葉であるだけに、国法（国典）への気負いが読み取れるようである。いずれにせよ国法（国典）とは、わが国におこなわれてきた法制の攻究にその意味を求めてよいだろう。

皇典講究所教程表

ではお題目はさておくとして、具体的にはどのような学びが行われたのか。国学院設立以前、皇典講究所の文学部の教科の一つにすでに法令がみえるので参考にする。『皇典講究所教程表』によると、本科第三年から第五年に至る全六級のカリキュラムで、正・副両科で以下の文献が用いられた。第三年第六級（正：令義解・禁秘抄、副：姓氏録・神祇志・唐六典）、同第五級（正：令義解・逸令、副：職原抄・公事根源・唐六典）、第四年第四級（正：律疏・逸律、副：法曹至要抄・金玉掌中抄・唐律疏義）、同第三級（正：延喜式・儀式、副：北山抄・貞永式目・唐律疏義）、第五年第二級（正：延喜式・儀式、副：江家次第・貞永式目追加・明律）、同第一級（正：類聚三代格・類聚符宣抄、副：刑法・治罪法・明律）のごとくである。

右からは、①日本法制史料の講読を一義とし、一方では唐・明代の中国法制史料も参看されたこと、②国法は六～四級までは前近代の行政法・刑法を基本に、宮中儀礼の故実書・神祇関連法も学ばれたこと、③三～二級では古代の儀式書が用いられたことなどが読み取れる。そして、それまでの学びと一線を画すのが、一級の④『類聚三代格』や『類聚符宣抄』など法運用の実際を知る文献が使用されたことである。両書が法を政務上に運用するうえでの施行細則や具体的実例・文例集であることは興味深い。すなわち、本学の国法の実とは、法制度の建前と運用実態の歴史が、史料に基づいて学ばれた点にあったわけである。

研究開発推進機構助教（特別専任）　比企貴之

研究者に聞く

非営利組織の会計に向き合うことで、ミッション達成に貢献できることがある

経済学部・金子良太教授

興味を持った2つのきっかけ

非営利組織というものは私にとって、会計という観点における研究対象であると同時に、公認会計士として関係してきた実践的な場でもあります。

追ってお話しするように、若い頃から非営利組織には興味を抱いていて非営利組織における会計についても研究していたのですが、より本格的に取り組むことになる決定的なきっかけの一つは、2009年10月から11年3月にかけての国外派遣研究員としてのアメリカ滞在でした。

日本を含めたアジアの方々がさまざまな非営利組織を立ち上げ、例えば桜祭りといった文化を現地の人たちに紹介して伝えていくような取り組みや、アメリカにやって来ればかりの人を地域社会に適応できるよう手助けする活動などを行っていたのです。

私もその一端に参加してみて、会計だけではなく非営利組織というものの意義に、惹きつけられるようになりました。例えば教育、医療、発展途上国の支援、まちづくりなど、非営利組織は幅広い活動を行っていて、私たちの生活に密接に関係したものとなっているわけです。

そうした実感を抱きながら日本に帰ってきたのが、2011年3月。図らずも、帰国直後に東日本大震災が発生しました。

多くの方々が亡くなられ、残された方々も心身や生活環境ともにさまざまな傷を負われたわけですが、そのなかで多くの団体が震災復興へ貢献していったことは、ご存じの方も多いでしょう。私自身も、阪神淡路大震災の被災地で大学生活を送っていました。

その懸命な活動を見ながら、私たちの社会で非営利活動がなりました。しかし、そうした生活の最中にあった2000年代のこと、世の動向を見聞きしながら自分も活動や研究に取り組んでいくなかで、公認会計士、そしてそれを取り巻く世界が、お金儲けのことばかりに偏りすぎているのではないか、と疑問を抱くようになりました。

会計といえば企業の利益や税金を計算するものという前提のなかで、当時は華やかなベンチャー企業が続々と世に出てきていた時代でもあり、私たちの周辺にギラギラした空気があったのは、正直な事実です。私自身は物欲もそれほど強くない人間であることもあって、そうした空気にはちょっとついていけないな、と感じていました。

決して皆がそうではない、ということ――企業会計に携わっている公認会計士も、あるいはベンチャー企業の方々であっても、良心のもとに活動されている人たちもたくさんいるということは、前提とした話ではあります。あくまで、私が当時感じた時代の空気をめぐる回想であることを、ご承知おきいただければと思います。

自分はちょうど30代に突入しようとしていた頃でしたから、これからどうしようか悩みました。研究分野としても、競争が激しい企業会計のことをやっていくのかどうか、という問題もありました。

あれこれと考えたときに、何か新しい世界へと踏み出せないかと視野に入ってきたのが、未開拓の領域が多く残っていた非営利組織の会計をはじめとする公会計分野だった、ということなのです。

未開拓の非営利組織会計へ

私自身のことを振り返ってみると、伝統ある商業科で知られていた高校の生徒だった頃には すでに、会計学の基礎である簿記を学習し、公認会計士になることが目標でした。もちろん、企業会計がその勉強の中心であり、将来的にも取り組むものとして念頭にあったわけです。

やがて大学で勉強を進め、公認会計士試験に合格することができました。そこで私がとった行動は、大学の図書館に通いつめるというものでした。実は試験合格後に、会計士の卵としてアルバイトをすることがあったのですが、実務にあたっている先輩たちが喋っている内容が、ちんぷんかんぷんだったのです。もともと本を読むことが好きだったこともあり、学生のうちに少しでも知識を深めることができればと、試験合格後に大学の図書館に足繁く通って専門書を読むようになりました。

会計の本は、文字通り、棚の隅から隅まで読みました。するとやはり、知らないことがたくさん書いてあった。まだ、勉強を続けたいな――そう強く思ったのが、会計学の研究者になる第一歩だったのかもしれません。当時指導いただいていた先生の勧めもあり、大学院へと進むことになりました。

資格を保有する公認会計士としての仕事をしながら、会計学を専門とする大学院生、やがては大学教員として研究を進める、という日々を送るようになりました。しかし、そうした生活の最中にあった2000年代のこと、世の動向を見聞きしながら自分も活動や研究に取り組んでいくなかで、公認会計士、そしてそれを取り巻く世界が、お金儲けのことばかりに偏りすぎているのではないか、と疑問を抱くようになりました。

会計といえば企業の利益や税金を計算するものという前提のなかで、当時は華やかなベンチャー企業が続々と世に出てきていた時代でもあり、私たちの周辺にギラギラした空気があったのは、正直な事実です。私自身は物欲もそれほど強くない人間であることもあって、そうした空気にはちょっとついていけないな、と感じていました。

決して皆がそうではない、ということ――企業会計に携わっている公認会計士も、あるいはベンチャー企業の方々であっても、良心のもとに活動されている人たちもたくさんいるということは、前提とした話ではあります。あくまで、私が当時感じた時代の空気をめぐる回想であることを、ご承知おきいただければと思います。

自分はちょうど30代に突入しようとしていた頃でしたから、これからどうしようか悩みました。研究分野としても、競争が激しい企業会計のことをやっていくのかどうか、という問題もありました。

あれこれと考えたときに、何か新しい世界へと踏み出せないかと視野に入ってきたのが、未開拓の領域が多く残っていた非営利組織の会計をはじめとする公会計分野だった、ということなのです。

かねこ・りょうた　専門は、財務会計・非営利組織会計。公認会計士・米国公認会計士でもある。「内閣府特定非営利活動法人の会計の明確化に関する研究会」委員をはじめ経済産業省の委員などを歴任。主な著書に『非営利法人の税務論点』（中央経済社、2022年）、『社会福祉法人の課題解決と未来の展望』（同文舘出版、2021年）など。

社会的課題と関わってきたNPO

私が非営利組織の会計というものに興味を持ち始めた2000年頃、ある公認会計士の先輩から「最近どうなの？」と聞かれ、「今後は、非営利組織の会計に重心を移していこうと思うんです」と話したところ、「そんなことが金になるのか」と言われたことが、強く記憶に残っています。

公認会計士の世界において、企業会計という分野は大きなマーケットである、ということは事実です。その世界を研究する会計学においても、企業会計が中心を占めてきたということは、何の不思議もありません。そもそも非営利組織の側が会計に関心がなかったり、公認会計士に払うお金がなかったり、ということもありました。非営利組織会計をはじめとする公会計分野は、端的にいって未成熟だったのです。

変革期を迎えるNPO

さて、このように非営利組織の存在感が社会のなかで大きくなるにつれて、非営利組織の会計に、企業会計の考え方や方法が組み込まれるということもました。多くなってきました。

そもそも非営利組織には、寄付や補助金などの提供者に対して、事業成果や財政状況を報告する責任があります。最近はクラウドファンディングが活用される場面も増えてきましたから、体感的にもご理解いただきやすいかもしれません。補助金の場合ですと、その源泉は税金などであるわけですから、さらに慎重な使用や成果報告が求められます。

また、特定非営利活動法の改正などを経て、寄付にともなう税制上の各種優遇措置も拡大してきましたので、ステークホルダーに対して適切な会計報告を行っていく必要は、当然あるわけです。

非営利組織会計の変革を先行して進めてきたアメリカでは、1990年代から現在に至るまで、複式簿記・発生主義会計という企業会計の考え方を取り入れた体系が採用されてきました。もちろん、企業と非営利組織は組織目的や取引のあり方が異なるわけですから、非営利組織に対して独自の規定も設けられています。ともあれ、財務会計基準審議会（FASB）は一貫して、非営利組織の会計に関する検討を進めています。

他方で、企業・政府・非営利組織が単一の会計基準を用いていたニュージーランドでは、2014年以降、企業と政府・非営利組織とで異なる会計基準を用いるようになりました。つまり、企業会計化が進んでいく非営利組織会計の世界において、方向転換ともいえるような事態を見せたのです。

その後、社会における非営利組織への注目度は高まり、公認会計士が活躍する場の一つにもなってきました。10年後にその先輩と会ったとき、おそらくは当時のことを覚えていらっしゃらなかったのでしょう、同じように「最近は何をやっているの？」と聞かれ、「非営利組織の会計です」と答えたところ、「いいところに目をつけたね」と言ってくださったこともまた、記憶に残っているエピソードです。

近年は社会全体で、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）やESG（Environment：環境、Social：社会、Governance：企業統治――を考慮した投資や経営、事業活動）といったことが検討され、取り組まれるようになりました。社会的な課題としては新しいものだと捉えられがちですが、しかしこうして注目を浴びるようなフィールドに早くから関わり、課題に取り組んできたのが非営利組織である、ということもいえるように思います。

会計学からミッション達成を支えたい

私としては、これらの動向を比較検討するなかで、非営利組織の会計の今後を考えていきたいと思っています。

非営利組織会計のビジネス化は、どうしても進んでいくと思います。というのも非営利組織が非常に発展したアメリカでは、数多くある非営利組織の生き残りということもまた、求められるようになってきました。草の根で活動をしていて、会計になんて興味がない、ということは組織が続いていかないということです。ガバナンスがしっかりしていなければ大口の寄付は受けられませんし、組織のパフォーマンスを最大化しなければサバイブ（生き残り）できないわけですね。

一方で、非営利組織が企業と大きく異なる点は、営利を目的とするのではなく、ミッション（使命）を果たすことが組織としての活動の核にある、ということでしょう。企業会計という考え方をインストールすれば、非営利組織の活動がすべて最適化するのかといえば、そうではないわけです。

非営利組織では誰もがミッションに必死になる。その反動として会計を含めたバックオフィスのことが疎かになってしまいがちになる。とても大事なミッションを掲げ、自身としても才能に溢れているような人であっても、せっかく立ち上げた非営利組織が続いていかないということについて、改めて思いを馳せるようになった。こうした経験が、私が非営利組織の会計というものをそれまで以上に専門的に研究するようになった大きな背景になります。

ただ、非営利組織の会計というものは、会計学のなかでも議論が熟するのはこれからという分野です。そもそも、おそらく皆さんがイメージされる通り、会計といえば企業会計というのが、会計学のなかでも、あるいは公認会計士の活動のなかでも一般的でした。

日本に限ってみても特定非営利活動促進法が制定されたのが1998年ですから、会計学において非営利組織のことを考えるということ自体が新しい物事であることは、ご理解いただけると思います。

国学院大学博物館改称10周年

笹生衛館長に聞く

平成25年の改称から10周年を迎えた国学院大学博物館。研究拠点、教育での活用、一般への成果公開など多様な役割を担っている。「博物館は国学院大学を体現する場所」と語る笹生衛館長は、コロナ禍を経て、同館を基点に2つの循環が生まれてきているという。今後の展望と併せ話を聞いた。

博物館はどのような施設でしょうか

国学院大学博物館の淵源は、昭和3（1928）年に、当時学生であった樋口清之博士（1909～97）によって創設された考古学標本室です。また、38年に本学創立80周年記念事業で設置された神道学資料室も当館に連なります。その後、両組織は幾度かの改称のち統合され、平成20年には伝統文化リサーチセンター資料館が開館。平成25年に「国学院大学博物館」と改称し、今年で博物館としてのスタートから10年を迎えました。研究・教育の拠点、社会への成果発信の場としての役割を担っています。

常設展示は「校史」「神道」「考古」の3部門で構成しています。古来の祭祀や信仰に関する埴輪や縄文土器などの遺物、本学の歴史や国学にまつわる資料と国学院ならではといった内容になっています。特徴は「モノ」と「心」を大事にしていること。単に「モノ」を陳列するだけではなく、「モノ」から日本文化の「心（精神性）」を明らかにすることを重視しています。

博物館がある意味とは

学術資産の収集、保護が全ての博物館に課せられた使命です。本学では、神道や考古学など日本文化に特化しています。

収蔵した学術資産を公開することの意味は、実物の良さにたどり着き、直感を得てもらうことです。古文書であれば紙の質感や文字の風合い、土器であれば大きさや職人の手による微妙なでこぼこや指紋のあとなど、実物を見るからこそ「モノ」の背景にある人の存在や「心」を感じることができます。

当館には、平成21年から今年5月末までで約50万人が来館されました。神道資料を真剣なまなざしでご覧になる方もいれば、考古資料を見て「すごい」と声を上げる方もいます。

もちろん、単に学術資産を公開すればよいというものではなく、常に「国学院大学博物館」という存在の役割を考えながら進んできました。その中で、2つの循環が生まれてきたと感じています。1つは「研究・教育の循環」、もう1つが「大学と社会での循環」です。

研究・教育の循環とはどのようなことでしょうか

博物館の存在が、本学教員の研究成果と学生の学びを繋ぎ、相互に影響を与えるような循環が生まれてきています。

博物館では、教員による最新の研究成果の発信を積極的に行っています。例えば、縄文時代の重要遺跡である居家以岩陰遺跡（群馬県長野原町）の発掘調査や最近では神道の「祓」に関する研究成果を活かした展示を開催しました。また、過去から脈々と続く研究も同様に展示に活かされています。11月19日まで行う伊豆三嶋信仰に関する特別展では、神道考古学を確立した大場磐雄博士（1899～1975年）から蓄積された研究成果が活きています。

学生たちは展示を通じて、日々の授業を担当する教員たちの「研究者」としての姿とその研究にふれることができます。授業で学んだ内容もあれば、新しく知る内容もあるでしょう。座学だけではなく、遺物や歴史資料など本物の学術資産を目にすることと併せ、学生は学びの実感を持つことができますし、知的好奇心や探究心を広げ、深めるきっかけとなります。

ほかにも、学芸員を目指す学生たちが収蔵品で学術資産の取り扱いを学ぶといったことも行っていますし、『論語』展では、研究に取り組む大学院生が展示解説に協力するなど、学生自身にとっての体験、実践の場としての活用も進んでいます。また、収蔵品はデジタルミュージアムを通じて、高解像度画像を公開しています。図書館が収蔵する貴重図書など、全学的な学術資産を公開するプラットフォームにもなっていて、学内外の教員、学生、一般の方の研究や学修にも役立てられています。

これは博物館という存在があるからこそ取り組めることです。教員の研究成果により、学生の学びが深まり、実践の場としても機能する。博物館がハブとなり生まれるこの循環が、次世代の日本文化研究者の育成や、学生の見識を深めることに繋がると考えています。

学術資産を魅せる未来

大学と社会での循環はどうでしょうか

博物館の活用方法が広がり、学術資産や研究の成果がより広く社会へ循環するようになりました。

大きなきっかけはコロナ禍です。日本でも感染が拡大し、緊急事態宣言が発出されると当館も臨時休館となりました。その後も数年間は短縮開館といった対応を余儀なくされました。全国の博物館も同様の影響を受け、社会の中で知的好奇心を満たす機会が失われていくと感じました。

そこで、かねて必要性を感じていた動画コンテンツとして始めたのが「オンラインミュージアム」でした。教員、研究者、学芸員が協力して動画を制作し、動画サイトで公開しています。常設展3部門の紹介だけではなく、年数回実施する企画展も取り上げています。企画展の動画では、単なる展示紹介だけではなく、さらに深い解説を研究者が行う「ミュージアムトーク」も公開しています。多くの方にご視聴いただいており、新たなファンが生まれたと思います。

こういった積み重ねの成果か、近年ではメディアで取り上げられることも多くなりました。ニコニコ美術館や日曜美術館、ぶらぶら美術・博物館といった番組での紹介や、企画展とコラボレーションした特別生配信などの機会が生まれたのです。多い時には、数万人の方が視聴されるなど、みなさんの日本文化への興味の強さも実感しました。動画を見たことがきっかけとなり、実際の展示を見に来館されるという想定以上の効果もありました。

コロナ禍は多くの困難がありましたが、時間や距離の制約をオンラインの活用によって超える機会にもなり、新たな博物館の在り方や活用の可能性が広がりました。結果として、社会に成果を還元、循環することが一層進んだことは間違いないと思います。

10年間の振り返りと今後の展望は

博物館としてスタートしてからの10年を振り返ると、本学創立以来140年の歴史で蓄積してきた学術資産を持つ博物館は、非常に重要な意義を持つということを再認識しました。

はじめにお話ししたように、本学は、日本の文化や伝統の講究を創立以来の使命として掲げており、収蔵してきた学術資産も神道、考古学といった日本文化に関する「モノ」に特化しています。収蔵する学術資産は、10万点を超え、国内だけでなく世界的に貴重な品も多くあります。それらは、研究を進める上で必要不可欠な「モノ」、つまり実物資料です。

伝統文化を考えるとき、「モノ」は地に足をつけた研究を進めるためには大変重要です。そして、実物資料から得られた最新の研究の成果は学生の学びへ還元されています。学術資産によって支えられる展示をキャンパスや動画で社会に発信することにより、皆さんの知的好奇心にも応えることができます。

日本の文化や伝統にふれ、より理解してもらう機会を提供する。これは、わが国独自の文化を未来へ継承していくことに他なりません。その役割を担ってきた博物館は、「国学院大学」を体現する場所だと思います。

「研究・教育の循環」「大学と社会での循環」に加え、「日本文化の未来への継承」―全ては先人たちが蓄積してきた学術資産が根幹にあります。「国学院大学の博物館」だからこそできることをさらに推し進めることで、博物館は2つの循環と未来への継承を進めるハブとしての役割を果たしていきたいですね。

博物館オンラインミュージアムはこちら

考古ゾーン

考古学は、主に遺跡・遺構・遺物など、地中に埋もれていた「モノ」を研究対象として、無文字社会から今日に至る人類史を探求する学問である。ここでは、考古学陳列室の創設以来、博物館が収集してきた考古資料によって世界の中における日本列島史を俯瞰するとともに、文学部・文学研究科考古学研究室の学術調査や、国学院ならではの神道考古学的な研究成果も交えて、この列島に生きた人々の「心」の歩みを辿っていく。

神道ゾーン

古くから人々は、信仰の「心」が込められた「モノ」を用いて、日本に根差した神々へのまつりを行ってきた。ここでは、日本各地の神社―信仰が表現される場―を中心に行われてきたまつりに焦点を当て、そこで用いられる「モノ」と、その中に込められた「心」との関係を明らかにする。そして、時代ごと、あるいは場所ごとに多様な姿を見せる日本文化とその基層である神道の特質にも迫る。

校史ゾーン

国学院の校名に冠する「国学」とは、日本の伝統文化に関する諸現象・事物の成り立ちとその本質の解明を目指した学問であり、古典籍や古器古物などの「モノ」を通して、日本人の「心」を究明する総合的な日本文化学である。ここでは、国学院およびその設立母体である皇典講究所関連の資料や、本学所蔵の資料・コレクションを通して、本学における伝統文化研究・教育の実態を明らかにし、「モノ」と「心」に関する本学の歴史と学問の展開を追う。

院友会支部の協力による物産展

母校へようこそ！賑わうキャンパス

ホームカミングデー初の祝日開催

国学院大学の卒業生（院友）と家族らが思い出の詰まったキャンパスに集う「ホームカミングデー」が10月9日、渋谷キャンパスで開催された。初の祝日開催ながらあいにくの雨で心配されたが、会場では学術、スポーツ、エンタメと多岐にわたるイベントが催され、各地から訪れた院友らで賑わった。

■正しいスポーツ観戦とは

開幕セレモニーに続いての特別講演では、ソチ冬季五輪男子フィギュアスケート5位入賞の実績を持つ人間開発学部健康体育学科の町田樹（たつき）助教が、「スポーツを『観る』とは何か？」と題して「正しくスポーツ観戦を楽しむ術」を伝授した。

町田助教は「難しいとされるアート鑑賞と同等かそれ以上にスポーツ観戦は難しい」とし、その背景に「ナショナリズム、ヒロイズム、キャラクタリゼーション、ジェンダーという4つのメディアによるバイアス（偏り）が存在する」ことを強調。「知らぬうちに方向づけられてしまうことを避けるには、スポーツの本質を見抜く批評眼を獲得することが肝心」と訴えた。

さらに「プレーに込められた一つ一つの意図、選手の成長度合いや試合の歴史的意義を文脈化することで批評眼は養える。情報収集や観戦経験を積み重ねてリテラシーを高めてほしい」と町田助教。「スポーツを観る人もアスリートとともに価値を生み出すプレーヤーの一人。競技力と観戦力の交わるところに価値が生まれる」と結んだ。

スポーツ観戦を論じた町田助教

■「日本」を学ぶ講演&トーク

この日は針本正行学長による特別講演「源氏物語の魅力―本学所蔵貴重書を読む」も開催。本学図書館所蔵の河内本『源氏物語』や注釈書の『河海抄』などを紹介しながら「紫式部の自筆本は残っているか？」「光源氏のモデルは？」の2点について論じ、「光源氏のモデルは宇多天皇の第四皇子・敦慶親王とされるが、『日本書紀』に始原が求められる『光る君』という表現がその高貴さを象徴している。『源氏物語』は先行する書籍から受け継ぐ豊穣の表現世界を展開する」と述べた。

源氏物語の魅力を語った針本学長

一方、国学院大学博物館で開催中の特別展「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」に合わせたトークセッションも行われ、同館の笹生衛館長（神道文化学部教授）、内川隆志副館長（文学部教授）、研究開発推進機構の深澤太郎教授と吉永博彰助教の4人が登壇。伊豆半島と諸島を生み出したとされる三嶋神が時代の変遷によって火山鎮護の神から武家の守護神に変容したいきさつを解説した。

■出雲路へ声援熱く

同日開催となった「出雲駅伝パブリックビューイング」も目玉の一つ。会場にはほぼ満席の観衆が詰めかけ、オンラインでサプライズ登場した前田康弘陸上競技部監督や出場選手らに熱い声援を送った。屋外では、院友会の各支部などの協力で物産展も行われ、郷土の自慢の品を販売。各ブースでは、特産品を紹介しつつ、参加者らと会話を交わしていた。コロナ禍で活動の中断や制限を余儀なくされていたたまプラーザキャンパスでのミツバチ育成事業「万葉エコBeeプロジェクト」の学生たちも出店し、復活をアピールした。

インフォダイジェスト

…在学生 …保証人 …卒業生 …一般 …受験生
内内容 日日にち 時時間 場場所 対対象 定定員 料料金 申申し込み 問問い合わせ

大学からのお知らせ

令和５年度学費等納付金について

内令和５年度学費等納付金（後期）口座振替日は、11月27日㈪です。詳細は、10月中旬に発送した「学費等納付金納入のお願い」や大学ＨＰをご確認ください。
問経理課、学生生活課、たまプラーザ事務課、大学院事務課

「指定寄付金」ご協力のお願い

内学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広く寄付を募っています。寄付の種類は、「学生・生徒等の奨学基金」「学生・生徒等の活動支援」「教育・研究振興支援」「施設・設備充実支援」の４つに加え、学生の課外活動を支援するための「課外活動支援（スポーツ強化部会など）」や「メッセージ募金」を設けています。「メッセージ募金」は、スポーツ活動や課外活動などに熱心に取り組む学生に向けて、ＨＰ上からメッセージを直接投稿してもらう仕組み。ワンコイン（500円）から寄付が可能で、メッセージはそのまま専用ＨＰに公開されます（匿名可）。
申専用用紙またはインターネットでのクレジットカード決済（VISA、MasterCardの２種類）が可能です。
問総務課（☎03・5466・0111）
※本法人への指定寄付金は税制上の優遇措置を受けることができます。募金に関する情報は専用ＨＰ（二次元コード）で閲覧できます。

イベント

令和５年度 オンライン公開講座「渋谷を科学する―渋谷学」

内国学院大学では平成14（2002）年から創立120周年記念事業として、学部・学科を超えて学際的に「渋谷を科学する」取り組み、「渋谷学」をスタートさせ、現在に至っています。
この講座では「渋谷学」の研究成果に基づき、今や東京・日本を代表する都市となった渋谷について、１回60分・全５回の講座から多角的、多面的に考えます。
※視聴にはパソコン・スマートフォンなどの端末とインターネットに接続できる環境が必要です。
日配信中～11月30日㈭
料7500円
申専用ＨＰ（二次元コード）から申し込み
問エクステンションセンター
（☎03・5466・0270、✉jigyou@kokugakuin.ac.jp）

令和５年度 国学院大学文化講演会

内コロナ禍を契機として、コミュニケーションの在り方は大きく変わりました。直接意見を述べ合う機会が減った時期を経た今、講師に福澤朗氏（フリーアナウンサー）をお招きし、「心をのせたコミュニケーションが人生を豊かにする」として、改めてコミュニケーションに必要な要素を紐解き、人生を豊かにするために何が必要であるのかを考えていきます。
日11月11日㈯14時～15時30分
場渋谷キャンパス常磐松ホール
定200名
料無料
申専用ＨＰ（二次元コード）から申し込み
問エクステンションセンター
（☎03・5466・0270、✉jigyou@kokugakuin.ac.jp）

令和５年度　公開学術講演会「国学院大学における博物館黎明期～戦後まもなくの考古学資料室」

内国学院大学博物館の淵源である考古学陳列室創設95周年、博物館改称10周年を記念して、下津谷達男氏（元国学院大学栃木短期大学教授）を講師に迎え、本学博物館の黎明期を振り返ります。
日11月18日㈯13時～14時30分
場渋谷キャンパス常磐松ホール
定200名
料無料
申11月11日㈯締め切り。定員に達した場合は受け付けを終了します。申し込みは専用ＨＰ（二次元コード）から
問研究開発推進機構事務課（☎03・5466・0104、✉kikou@kokugakuin.ac.jp）

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

企業セミナー

内各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が、業界や企業の説明をします。この機会に志望する業界や企業への理解を深めましょう。志望業界が定まっていない人は、さまざまな企業の話を聞いて興味・関心の幅を広げていきましょう。
日開催中～11月10日㈮
※終了日は変更の場合があります
対１～３年生

第４回ＷＥＢ合同企業説明会

内秋採用を行う本学学生の採用意欲が高い優良企業をお招きして開催する学内合同企業説明会です。就職活動を継続されている方はぜひ活用してください。
日11月15日㈬
対４年生

東急グループＤＡＹ

内東急グループの優良企業13社が参加して、業界および企業の説明を行います。
日11月15日㈬
時14時30分～17時
場有栖川宮記念ホール（渋谷キャンパス若木タワー18階）
対１～３年生

内定者アドバイザーによる相談受け付け開始

内就職活動を終えた４年生が、最新の情報と自らの経験を糧にアドバイスを行います。どのように就職活動を進めていったのか、志望する業界・企業をどんな考えで決めていったのかなど、下級生のみなさんに参考となる生の声を聞くことができます。民間・公務員にかかわらず就職に関わる疑問を相談してみましょう。
日月曜から金曜（大学休講日を除く）
時14時～18時
対１～３年生

小村さん・辻さん（観まち２）
福島のまち復興プランで受賞

大学生・大学院生がまちづくりのプランを提案し、競い合う「大学生観光まちづくりコンテスト2023」の福島復興ステージが９月15日、福島県富岡町で開催され、観光まちづくり学部２年生の小村恋晴（こはる）さんと辻響輝（ひびき）さんがＪＴＢ賞を受賞した。

同コンテストは、東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の事故で避難指示などの対象となった福島県12市町村へのまちづくりに関する提案を対象とするもの。今回は、「市町村が掲げる地域資源・観光資源に基づき、復興に向けて前向きに取り組んでいる方と連携した『観光まちづくりプラン』」がテーマ。全国から117チームが応募し、本選には選抜された11チームが出場した。

小村さんと辻さんは、「染め物のまち・川内村～川内村がDyeスキになるツアー～」として、同村の特産品である染物を核にしたまちづくりのプランを提案。他の受賞プランは大学院、大学の研究室主導で取り組み提案を行ったなか、小村さんと辻さんは独力で課題の抽出や現地調査、提案を行い、創造性と新規性が高く評価されての受賞となった。

審査員らの前でプレゼンテーションに臨んだ２人は、応募のきっかけについて「被災したまちの未来や在り方を考えたいと思った」と語り出し、「川内村の人々が村の魅力を再認識し、誇りを持てるようにしたい」と続けた。２人は、３泊４日で実施したフィールドワークで見聞きした村の現状や課題を踏まえ、地域の活性化や観光客の誘致を検討。「地域資源が豊富で、自然が豊か。地元の方の優しさ」と同村の良さを挙げ、それらを踏まえて「観光客の誘致と地域の活性化を検討した」と語った。

２人は、染物とワインや農産物などという同村の特産品同士を掛け合わせることで、新しい染物を生み出すことを提案。「新しいコンテンツだが、かつて村の産業の一角を担った養さん業と現在の産業との歴史的な繋がりを踏まえた」と語り、染物体験ツアーなどを通じた観光客の誘致を図ることを掲げた。プランの特徴については、「村の産業に一体感を持たせ、地域活性化も期待できる。多くの地元の方が関われ、自分も携わっているという意識を高められる」とした。２人は、体験ツアーについても「村の経済循環が高まり、染物体験の場所として空き家の活用なども行える」とメリットを説明。最後に「川内村の新たな姿を生み出すプランになる」と締めくくった。

落語研究会

切磋琢磨で噺を磨く

奥深さの先にある達成感を求めて

寺澤蓮さん（経３）

高座名・四代目若木家乃鼓太（のこった）

扇子片手に、次々と軽快な落語が響く。国学院大学落語研究会の練習風景の一コマだ。

落語研究会は、昭和32（1957）年に設立され、今年で66年となる歴史を持つ。第66代会長を務める寺澤蓮さんは、「新入生勧誘の時に先輩たちの様子や活動の雰囲気に惹かれました」と入部のきっかけを語る。

コロナ禍で一時は部員が12人まで減ったが、現在では31人が所属。「もともと落語に興味があったという部員もいれば、新しいことにチャレンジしたいと入部した部員もいます。最近では、落語を題材にした漫画をきっかけに興味を持ち、入部するケースも増えていますね」という。

同部は、若木祭や東京・浅草の演芸場などで開催する定期寄席で落語を披露している。ほかにも他大学との合同寄席、老人ホームなどでの出張寄席などで精力的に活動している。今年も近隣の小学校で寄席を披露。寺澤さんは、「子どもたちに伝統芸能に触れてもらえて、落語に取り組む一人として嬉しい」とはにかんだ。

稽古は週２回。基本的な噺を覚えることからスタートし、所作や演技など、伝統芸能である落語に必要不可欠なことを修得していく。「一通り基本的なことを覚えると、学生同士で噺をお互いに披露します。『ここが良かった』『もっとこうした方が良い』などお互いに批評して、稽古を重ねて噺を磨いていきます」と真剣な表情。

ＯＢ・ＯＧから指導してもらうことも多いそうだが、「まずは学生同士で実力を高めていくことが伝統」と語る。批評のやり方も、代々の上級生から下級生へ引き継がれてきた。新入部員には、先輩が普段の稽古の様子から合いそうな噺を用意するなど、後輩を育てる環境も受け継がれているものの一つだという。

高座での礼儀作法の修得や落語の稽古には全員が緊張感を持って臨む。だが、「厳しい一辺倒ではありません。真剣な切磋琢磨（せっさたくま）は大事にしていますが、和やかに過ごすところもあり、メリハリをつけています」と寺澤さんは会長としての顔を見せる。

現在は11月の若木祭での定期寄席に向けて稽古に取り組んでいる。寺澤さんたち３年生部員には、引退寄席となる。「扇子と手ぬぐい、自分の所作と語りで何役も演じ、情景を描ききる。余計なものがない分、奥深い。だからこそ笑ってもらえた時の達成感がある」と語る。コロナ禍でのオンライン寄席などを経て、改めて観客と向き合う寄席の魅力に気づいたという。部員も増え、後輩も頼りになるから安心して引退できるという寺澤さんは、「だからこそ最後は、一人の噺家としてやりきりたい。ぜひ若木祭の寄席に来てください」と笑顔を見せた。

神楽舞サークルみすゞ会

奉仕の心で舞う 神楽舞の美しさに惹かれて

荒川さん、山﨑さん、松本さん、町屋さん、桐田さん（左から）

装束に身を包んだ学生たちが、厳粛な空気の中で神楽舞を研さんする―国学院大学神楽舞サークル「みすゞ会」の活動風景だ。

同会は祭祀の際に奉納される神楽舞を修得し、学内や各地の神社などで奉仕を行っている。会長の松本瑞希さん（神文４）に入部のきっかけを聞くと、「高校３年生の時に観月祭を見学し、神楽舞の美しさに惹かれた」と教えてくれた。

現在は32人が所属するが、ほとんどが神楽舞は未経験の状態で入部する。「それこそ、新品の装束の仕付け糸を切ることから始まります」と松本さん。桐田歩実さん（神文２）は「同じ立場で、切磋琢磨していく仲間と出会えた」と初めの一歩から共に成長できる環境に笑顔を見せる。他の神道系サークルと連携する機会も多く、荒川さららさん（神文２）は「会を超えた交流があるので、学内での繋がりが広がる機会になっています」と語る。

舞の稽古が始まると、苦労も多いという。副会長の山﨑夏海さん（日文３）は、「自分の感覚と実際の動きにはどうしてもずれがあり、それを埋めるのが大変」と語るが、「直すべき点に自分でも気づけるようになってきた。少しは成長したかなと」とはにかんだ。町屋桃子さん（日文２）は、「二人舞、四人舞となると動きを合わせるのも一苦労。俯瞰（ふかん）した目線で確認してくださる先生からのご指導を受け、練習に取り組みますが、舞がそろった時には言葉で言い表せないほど嬉しいです」と充実した表情を見せる。

９月から11月にかけ各地の神社で多く祭祀が行われるため、同会への依頼も多い。はじめて神楽舞を奉仕した時の話を聞くと、５人全員が「とにかく緊張した」と口をそろえる。現地に行くと、舞う場所が限られていたり、雅楽の演奏もテンポが異なったりと臨機応変が求められる。だが、どんな状況でも祭式を守り、精いっぱい舞う。松本さんは「普段の練習で積み重ねてきたものが支えてくれる」と言葉に力を込めた。

奉仕は気づきの機会にもなっている。町屋さんは「参列される方にとって、一生に一度というような機会でのご奉仕もあります。伺ったお祭りの重要性も見つめ、緊張感を持って臨めるようになりました」、桐田さんは「その地域でずっと神社を守ってきた方々と出会えます。神様を大切にする人の心に触れると、改めて心を込めて奉仕しようと思う」と神明奉仕の心の涵養に繋がっている。荒川さんは「部に入るまで、神楽舞は非日常の存在でした。今は身近な存在になり、世界が広がりました。これからもずっと自分の世界の一部です」と神楽舞との出会いに感慨深げ。

山﨑さんは「入部のきっかけは何であれ、神楽舞を通じた奉仕の気持ちが、次の代にも繋がってほしい」と語る。４年間の活動を振り返った松本さんは「憧れではじめた神楽舞。その華やかさはずっと変わらない。奉仕を通じて得られるものはたくさんある。ぜひ、一人でも多くの人に入ってもらい、神楽舞に触れてほしい」と願いを語った。

ソフトテニス部

久保田・原ペア全国優勝

男子・西本・黒須ペアも準優勝

全日本学生ソフトテニス大会が９月１日から６日にかけ、石川県で開催された。国学院大学ソフトテニス部は、ダブルスで女子の久保田茜選手（日文３）・原千晴選手（中文３）ペアが優勝、男子の西本一雅選手（健体４）・黒須柾暉選手（神文３）ペアが準優勝となるなど好成績を収めた。

同大会は、大学対抗、ダブルス、シングルスの各選手権で構成される大学主要タイトル戦の一つ。大学対抗選手権は、男子の部には87大学が参加。同部男子は、４回戦までそれぞれ３－０と快勝。準々決勝では早稲田大学に接戦の末、２－３と敗れた。この結果、男子はベスト８となった。女子の部は、63大学が参加。同部女子は３回戦まで危なげなく突破し、準々決勝でも立教大学に３－０と快勝した。準決勝では、日本体育大学と一進一退の攻防を繰り広げたが、２－３と惜しくも敗れ３位となった。

男子ダブルスの黒須選手（左）・西本選手

ダブルス選手権は４、５日に開催。女子の部では、久保田選手・原選手ペアが安定したプレーで準々決勝まで突破し、準決勝でも日本体育大学ペアを破る勢いをみせた。迎えた決勝では、全日本選手権２位の実力を持つ東京女子体育大学ペアとの大一番に臨んだ。久保田選手・原選手ペアは一歩も引かずに気迫のプレーを見せ、大会史上に残ると評された激戦を繰り広げると最後は５－４と勝ち切り、見事に全国の頂点に立った。

男子の部では、西本選手・黒須選手ペアが勝ち進み、準々決勝で中央大学ペアを５－１と圧倒。準決勝では日本体育大学ペアとの接戦に勝利した。決勝では日本体育大学ペアに０－５と敗れたが、上位４ペア中３ペアを日本体育大学が占めるなか、牙城を崩す活躍を見せ、準優勝となった。

女子ダブルスで全国制覇の久保田選手（左）・原選手

今季４勝目の武内投手

硬式野球部　東都秋季リーグ

接戦のなか、２位に浮上

東都大学野球１部秋季リーグは第４週までを終え、国学院大学硬式野球部は２位で最終第５週に臨む。

第２週で同部は青山学院大学と対戦。９月18日の第１戦は０－６で迎えた八回裏に神山福生（もとき）選手（経営４）、柳舘憲吾選手（法３）の安打で３点を返し、九回裏には同点とするも延長戦の末、６－10と敗れた。翌19日の第２戦は、０－０で延長戦に突入。十二回表、無死満塁から土山翔生（どやましょうせい）選手（経営３）が左適時打を放ち、３－０で勝利した。22日の第３戦では、六回表に神山選手と田中大貴選手（健体３）の適時打で２－１と勝ち越す。篠本賢伸（ささもとけんしん）選手（健体１）も右適時二塁打を放ち３－１と突き放すと、投手陣が青学打線を抑え切り２勝１敗で勝点１を獲得した。

第３週は中央大学と対戦。27日の第１戦では、三回表に伊東光亮選手（経３）の二塁打などで１－０とすると五回表にも１点を加え２－０で勝利し、武内夏暉投手（健体４）は完封で３勝目。28日の第２戦は１－３と敗れた。

第４週では東洋大学と対戦。10月11日の第１戦では八回表、１死一・三塁から立花祥希（よしき）選手（健体２）のスクイズで１－０と先制しそのまま勝利。武内投手は４勝目を挙げた。12日の第２戦では０－２で迎えた六回裏に１点を返すと七回裏、１死二塁から神里陸選手（神文３）の右適時二塁打で同点に。延長十回裏、２死満塁から死球の押し出しで３－２となり勝利。同部は２位に浮上し最終戦に臨む。

卓球部　関東学生リーグ２部

男子２位・女子３位

関東学生卓球秋季リーグが９月12日から14日にかけ所沢市民体育館（埼玉県）で開催され、男女とも２部リーグに所属する国学院大学卓球部は男子が準優勝、女子が３位となった。

男女２部は６大学で構成され、各大学と最大７試合で対戦。先に４勝したチームが勝利を得る方式で行われた。同部男子は初戦で大正大学と対戦し４－２で勝利すると、第２戦は相手校の棄権で不戦勝。第３戦は法政大学と対戦し、一進一退の攻防を繰り広げて第７試合までもつれたが、惜しくも３－４で敗れた。第４戦は東洋大学に４－３で勝利し、最終第５戦では埼玉工業大学に２－４で敗れた。通算３勝２敗で大正大学、埼玉工業大学と並ぶも、同部は直接対決の結果や得失点差などから２位となった。

同部女子は、第１戦の東京女子体育大学に４－０と圧勝。第２戦の青山学院大学には１－４で敗れたが、第３戦の東京経済大学には４－０、第４戦の順天堂大学には４－１と連続で勝利。最終第５戦の東洋大学には１－４で敗れ、３勝２敗の３位で秋季リーグを終えた。

この結果から同部男子は10月７日、新座市民総合体育館（埼玉県）で開催された１部７位校の筑波大学との入替戦に臨んだ。試合は一進一退の攻防を繰り広げ、最終の第７試合まで勝敗がもつれる大接戦となったものの、最後は惜しくも３－４と敗れ２部残留となった。

K:DNA

2023 10

K:DNA——創立141年目を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

柔道部

羽田野選手 世界ジュニア銅

団体もキャプテン務め金メダル

2023年世界ジュニア選手権大会が10月４日から８日にかけ、オディベーラス（ポルトガル）で開催され、国学院大学柔道部の羽田野啓太選手（健体３）が男子66kg級の日本代表として出場し、銅メダルに輝いた。

この大会は、国際柔道連盟が２年に１度開催している10代選手の世界一を争う大会。将来の各国代表と目される選手が集い、男子66kg級には、34カ国から43選手が参加した。羽田野選手は１回戦でニュージーランド代表に一本勝ちを収めると、続く２回戦ではコロンビア代表と対戦し、残り１分で３回目の指導を受けた相手選手の反則負けとなった。３回戦ではパラグアイ代表に対し開始26秒で一本を奪う速攻を見せ、順調に突破。続く準々決勝ではエストニア代表と一進一退の攻防を繰り広げたが惜しくも敗れた。敗者復活戦に臨んだ羽田野選手は、カザフスタン代表を一本勝ちで破り３位決定戦へ進出。試合は、ヨーロッパジュニアチャンピオンで強豪のジョージア代表との勝負となり、両者一歩も引かぬ競り合いを繰り広げた。最後は、一瞬の隙をつき、技有を奪った羽田野選手が優勢勝ちとなり、銅メダルに輝いた。羽田野選手は、男子団体戦のキャプテンも務め、１回戦と決勝戦に出場。１階級上の73kg級を担い１回戦ではトルコ代表に、決勝戦ではフランス代表に勝利を収め、チームの金メダル獲得の原動力となった。

ほかにも９月30日から10月１日には、体重別学生日本一を争う男子第42回・女子第39回全日本学生柔道体重別選手権大会が日本武道館（東京都千代田区）で開催され、男子90kg級で中村俊太選手（健体３）が３位となった。

中村選手は初戦から順調に勝ち上がり、４回戦でも内股を決め一本勝ちで突破。続く準決勝では、日本体育大学の海堀陽弥選手との対戦に臨むと、両者一歩も譲らず延長戦に突入。試合時間が８分を超える接戦の末、惜しくも敗れたものの３位で表彰台に上がった。

同部からはほかにも10選手が参加し、同73kg級の大塚遥人選手（神文３）と同81kg級の騰川雄一朗選手（法４）もそれぞれベスト８と入賞を果たした。

銅メダルに輝いた羽田野選手（柔道部提供）

ゴールテープを切る6区の平林選手

陸上競技部

出雲駅伝4位 各選手が力走

学生三大駅伝の初戦となる第35回出雲全日本大学選抜駅伝競走が10月９日、出雲大社正面鳥居前から出雲ドーム前を結ぶ全６区間45.1kmで開催され、国学院大学陸上競技部は４位となった。

同部は、今季の三大駅伝全てでの表彰台を目標に掲げて大会に臨んだ。１区の上原琉翔（りゅうと）選手（健体２）は号砲とともに勢い良く飛び出し、観客で埋め尽くされた参道を駆け抜けた。４km 過ぎから先頭争いが４校に絞られると、上原選手は５位とつけ必死に前を追う。６km過ぎに青山学院大学、中継所手前で早稲田大学を捉えると、最後は３位で中継所に飛び込んだ。２区の青木瑠郁（るい）選手（健体２）は追走してきた青山学院大学と早稲田大学にかわされるも、１区２位で先行していたアイビーリーグ選抜（米国）を追い抜き、４位で同部主将の伊地知賢造選手（健体４）へ襷リレー。伊地知選手は、創価大学と城西大学の留学生選手の猛追を受け一時は６位となるも、襷を受け取った時点で19秒先行していた早稲田大学を追い抜き、５位で４区の山本歩夢選手（健体３）に襷を渡した。本学、青山学院大学、早稲田大学が30秒以内でひしめき合う中、山本選手は後続を引き離しつつ５位を維持した。５区は初の出雲駅伝となる高山豪起選手（法２）。襷を受け取った時点で46秒あった青山学院大学との差を12秒まで縮める走りを見せ、レースは最終６区へ。２年連続のアンカーとなった平林清澄選手（経営３）は、冷静にペースを刻み、４km過ぎに青山学院大学の背中を捉えると６km手前からは突き放して単独４位に浮上。その後も懸命な走りを続け、２時間11分７秒でゴールに飛び込んだ。優勝は駒沢大学で２時間７分51秒の大会新記録だった。

11月５日には、秩父宮賜杯第55回全日本大学駅伝対校選手権大会が熱田神宮西門前（愛知県名古屋市）から伊勢神宮・内宮宇治橋前（三重県伊勢市）を繋ぐ全８区間106.8kmのコースで開催される。

勢いよく飛び出す1区の上原選手

個人成績

区間	氏名	所属	タイム	区間順位	総合順位
1	上原　琉翔	健体２	23分６秒	３位	３位
2	青木　瑠郁	健体２	16分47秒	８位	４位
3	伊地知賢造	健体４	24分53秒	５位	５位
4	山本　歩夢	健体３	17分59秒	６位	５位
5	高山　豪起	法２	18分31秒	４位	５位
6	平林　清澄	経営３	29分51秒	４位	４位

総合順位（８位入賞まで）

順位	大学名	総合成績
1	駒　沢　大　学	２：07'51(大会新)
2	創　価　大　学	２：09'34
3	城　西　大　学	２：10'35
4	国 学 院 大 学	２：11'07
5	青山学院大学	２：11'28
6	早 稲 田 大 学	２：11'36
7	中　央　大　学	２：12'17
8	東　洋　大　学	２：12'35

以下略